旅行者

作　田辺 剛

［登場人物］女1～5、夫、妻、青年、弁護士

現代の日本からは時代も場所も遠く離れた世界。その果てのない荒野にぽつねんと小さな村がある。かつては町と言えるほどのにぎわいがあり、豊富な水を使って綿花などの農業で栄えたが、水は枯れてしまい人々の生活をかろうじてささえる程度になってしまった。村には駅がある。けれどもそれは建物としての駅ではなく、一日一回汽車が止まることからその場所をそう呼ぶほかないだけのことだ。村を通る線路は荒野を延々と走っている。どちらが上りでどちらが下りなのか区別がつかない。そんな荒野に孤島のようにして村はある。舞台はその村の外れにある家だ。そこには道化師の男とその妻が住んでいる。

1

ある晩冬の昼下がり。夫がコーヒーを飲みながら新聞を読んでいるところへ、妻が入って来る。

妻　クビになった。

夫　……。

妻　怪我したのよ子どもが。わたしが悪いんじゃないのよ。本棚のね、上の方にある本がいきなり落ちてきて腕の所に当たったのよ。すごく泣き出してね。みんな慌ててやってきた。ちょっと当たってあざになったくらいすぐに治るでしょ、子どもなんだから。けど奥さんすごく怒って。

夫　給料は。

妻　ないわよ。子どもの治療代よこせって言うもんだから給料使えばいいじゃんって言っちゃった。カッとなっちゃって。

夫　……。

妻　あんた仕事は？

夫　もうすぐ。

妻　そこの角のところに求人張ってあったわよ。線路を作るんだって。作業員。

行ったら？

夫　どこの線路。

妻　さあ。

夫　もう通ってるじゃないか。

妻　延長するのよ。

夫　どこに。

妻　知らないわよ。

夫　もういいだろ、そんなに延ばさなくても。遠くに行ってなにがある。

妻　もうちょっとかたい仕事したら？　そんな遊びみたいなんじゃなくてさ。

夫　砂嵐がひどすぎる。やってられるか今時そんなの。

妻　コーヒーやめてよね。

夫　（苦笑して）おいおい。

妻　無駄遣いできないんだから。

夫　お前の紅茶をなんとかしろよ先に。

妻　（窓の外を見て）あれ竜巻かしら。

夫　なんであんなに高いんだ。ただの葉っぱだろ。

妻　こっちには来ないわね。

夫　あのカップなんかも売ってしまえばいいじゃないか。

妻　（夫に）本当に許さないから。

沈黙。

妻　けど今日の汽車は来るかしら。

夫　（新聞に記事を見つけて）肉屋の娘に子どもができたらしいぞ。

妻　肉屋の娘！　どうしてあんなブスに子どもができるの。

夫　雇ってもらえるんじゃないか。

妻　どうしてわたしを当たり前のように働かせるの？　なにか違うんじゃない？

沈黙。

妻　（竜巻を見て）いっそ、こっちに来てくれればいいのよ。全部空に巻き上げて。
夫　死にたくはないな。
妻　はっ！？
夫　なんだ。
妻　別に。
夫　だって死にたくはないだろ。
妻　そうね。（と妻は出ていく）

夫、一人になって新聞を読み続けている。しばらくすると女２が荷物を抱えてやって来る。片手には紙切れ。

女２　延々と続く線路を歩いてここまでやってきたのは切符を買うお金もなかったからです。家を出たのは朝日が見える前でした。夜の闇がやわらかな光に追い払われるようにわたしもまた街を出て行ったのです。光がやわらかいと感じられるのは、それだけ朝が冷え込んでいたからでした。わたしは着られるものを着られるだけ着て、朝日が見えるほうへと歩いていったのです。それからずっと線路をつたってやって来ました。道先を案内する人がいるはずもなく、手元の地図は不安をあおるだけの頼りないもので、だからといって引き返すわけにはいかない。わたしはわたしの帰る家をもはや所有していないのです。（室内を見て）それにしても素敵な家ですね！　余計な調度品もなくすっきりとしている。これに比べればわたしの家はごちゃごちゃしすぎていたのかもしれません。あ……けどもうわたしの家、わたしの部屋、わたしの廊下、わたしの台所、わたしの居間、あと、わたしの庭……すっかり古いもののように思えてきます。まだあの家を離れてから一週間しか経っていないのに、もうその細かなところの記憶はあいまいです。もう戻ることはできない。確かなのはわたしはあの家を出たということ。もちろんその出立はわたしの望んだものではありませんでした。誤解なさらないでください。わたしは一生懸命守ろうとしたのです。両親から受け継いだあの家を、あの土地をなんとかして守ろうとしたのです。しかしわたしの力以上に法の壁は厚かった。あの執行官の顔だけは忘れられません。冷たい表情で必要なことを必要な言葉だけで語る。そう、ここまでの途中でわたしは何度も後ろを振り返りました。いえ、それは家から離れるのが寂しかったからではなく、あの執行官がもしかすると追いかけてくるのではないかと想像したからです。もちろんそんなことはありえないことです。あの人からすればあの家の住人を追い出しさえすればそれですべては解決しているのですから。けど、どうしても振り返ってしまう。わたしはそんな追い立てられるような気持ちでいたのですよ。
夫　……は？
女２　よろしくお願いします。
夫　あ、え、どうも。
女２　初めてお会いするのに、初めてのような気がしない。やはり血のつながりというのはあるものなのですね。
夫　え、血？
女２　ずいぶんとお若くいらっしゃって。すみません、父から聞いただけでは、もっとお年を召されてるのかと思いました。
夫　ああ。
女２　妹と姉を外に待たせてあります。よろしいですか。
夫　なにが？
女２　二人とも叔父さんに会うのを楽しみにしてたんですよ。
夫　あ……違う。なんか違う。
女２　え？
夫　初めてでしょ。会うの。
女２　わたしは昨日夢に見ました。こうしてお会いするのを。
夫　うん……出た覚えがないもん。

女２、夫に突然抱きつく。

夫　うおっ。

女2　すみません、けどやっと、やっと……これでわたしたちの旅も終わるんだと思うと。
夫　ちょっと待て、いや違うと思うんだな。
女2　なにがですか。
夫　とりあえず……。（と女2を離そうとする）
妻　（入ってきて）誰？
夫　あ。
妻　また？　またなの？　こんな昼から堂々と。
夫　違う、違うってば。
妻　分かりました。（と去ろうとする）
夫　ちょっと待て。（と妻の腕をとる）
妻　離して。だって何度言ってもあなたは分からないじゃない。分かった分かったっていつも涙を流して謝っても、朝になると全部忘れる。
夫　そんなことないだろ。
妻　ふざけないで。それの繰り返しだったでしょ。あっちに行ったら誰かをひっかけ、こっちにいったら誰かをひっかけって。
夫　落ち着けとにかく。俺はコーヒーを飲んでいただけなんだ。
妻　いつもみたいにね。
夫　この人が突然、突然、いきなり……。
妻　はいはい。
女2　すみません。

沈黙。

女2　妹と姉をいいですか、外に待たせてあるんです。
夫　あんたもちょっと待て。
妻　いいわよ、好きにすれば。わたしが出ていくから。
夫　だから、ほら、妹と姉？　姉もいるんだよ。
妻　は？
夫　三人姉妹だぞ。三人もどうするんだよ。
妻　いいじゃない、相手してあげれば。あなたの趣味にあれこれいうつもりはないわ。
夫　だからそういうことじゃないんだ。
妻　離して。

妻は夫の手をふりほどき部屋の奥へと消える。

夫　ええっ？　なに？……そうだ、あんただ。なんだ……え？　叔父さん？
女2　ふふっ、わたしじゃありませんよ。
夫　分かってるよ。いいか、まず俺は叔父さんじゃない。
女2　なんとお呼びすればいいですか。
夫　呼び名ではなく。俺とあんたは親戚でもなんでもないって言ってるんだ。赤の他人なんだよ、きっと。
女2　え？
夫　悪いけど。
女2　だってここ（紙切れを見せて）住所、これですよね。
夫　住所って？（と紙切れを見る）
女3　（荷物を抱えて現れて）とりあえずお手洗い行きたいんだけど。
女2　待ってなさいって言ったでしょ。
女3　もう限界。どこ？
女2　あっちじゃない？

女3、夫を見るやいなや抱きつく。

女3　どうだった？
女2　好きにしたらいいって。
女3　良かったじゃない。（と部屋の奥へ消える）
女2　（女3に）姉さんは？
夫　おやおや、今のは？
女2　妹です。

夫　妹。
女２　すみません、行儀が悪くて。いつも注意はしてるんですけど。ことばだって男みたいで。けど良い子なんですよ、もとは。
夫　あんた、俺の話聞いてないだろ。住所はこれ、ここだよ。けど、わたしは叔父じゃない。

女２は目を閉じている。

夫　いいか。わたしは叔父じゃないんだ。きっと間違いだ、これは。な？
女２　……じゃあ、叔父はどこです？
夫　知らんよ。

女２は閉じた目を開いてぼんやりと宙を見るが、すぐに立ち上がり戸外へ向かう。

夫　おいおい、荷物を持って行けよ。
女２の声　姉さん、ちょっと起きて。姉さん。

女２は寝ている女１をひきずって部屋に入ってくる。

女２　道ばたで寝るなんて恥ずかしいから……ちょっとほら……ねえ、どんなにつらいことになっても誇りだけは失わないようにしようって言ったの、姉さんよ……起きて、起きて……よだれも。
女１　（女２の手を振り払って）あと五分だけ。
女２　五分ってなに。五分経ったらなにがあるっていうの。

女１は女２の手を振り払おうとして起きあがる。すると夫の姿が見えた。女１はゆっくりと起きあがり走って夫に抱きつく。そしてそのまま寝てしまった。

女２　信じられない。（夫に）姉です。
夫　それで最後？
女２　なにがですか。
夫　姉妹は。全部で何人？　まだいるの。
女２　三人です。間違いなく。姉と妹と。
夫　……あ、もう一人は向こう（トイレ）だ。いやそういうことよりも！　だから、あんたたちはわたしの家に勝手に上がり込んでいる。
女２　すみません。

沈黙。

夫　うん、違うんだ。謝ってほしいわけじゃないんだ。赤の他人なんだと分かったんだから、とりあえず出ていくのがスジってもんだろ。
女２　お水をいただけますか、一杯。
夫　どういうこと？
女２　喉が渇いて。

妻が部屋の奥から飛び出してくる。

妻　聞こえた！？　いま、汽車の音。
夫　おいおい。
妻　汽笛よ、汽笛。

三人、耳を澄ます。汽笛は遠ざかっていった。

女２　少しだけ。
夫　行ってしまったな。
妻　早いんじゃないの、もうそんな時間？
夫　本当に行くつもりなのか。
妻　今日は仕方ない。明日の汽車にする。

夫　だってほら、見てみろ。（女1を指して）お姉さんだと。
妻　死んでるの？
夫　寝てるんだ。
妻　姉妹？
女2　ええ。
夫　便所には妹もいる。な？　この人たちは街から来て、いきなりうちに入ってきたんだ。まったく初めて会うんだよ。（女2に）な？
女2　……ええ。
夫　とにかくそういうことなんだ。勘違いなんだよ、お前の。出ていく必要なんてないだろ。
妻　賽は投げられた。
夫　「サイ」？　「サイ」ってなに？
妻　……。

妻は部屋の奥へと消える。夫も妻に続く。
女2は夫が飲んでいたコーヒーを飲んでしまう。

女3　（現れて）叔父さん、奥さんとうまくいってないのかしら。

女2、女1の側で横になる。

女3　そんなところで寝るの？
女2　ちょっとね。ちょっとだけ。
女3　なんのお店だったんだろ。
女2　なにが？
女3　ここ。
女2　どうしてお店なの。
女3　だってそうでしょ。似たような家が何軒もあったじゃない。ほとんどがつぶれかけだったけど。花屋に肉屋に靴屋もあった。なんの跡形もないけど、ここは……こんながらんとした場所、その辺に商品を並べる棚、そっちにも。
女2　さあ。
女3　言ったことあったっけ。わたしパン屋さんになりたいと思ってたのよ。ちっちゃなころ。もしかしたら、ここもそうかもしれない。（隅の床を指でなぞって）ほら、これ、小麦粉じゃない？
女2　あなたも少し休みなさい。疲れてないの？
女3　姉さんたちが貧弱なのよ。半日歩いただけじゃない。
女2　歩くことが生活することのような一週間だった。わたしはもう十分。
女3　（戻ってきた夫に）ここはパン屋さんだったんですか。
夫　え、ああ。
女3　やっぱり！　叔父さんがパンを焼く係で奥さんが店に立つ。
夫　俺たちはこのパン屋がつぶれて空き家になってから入ったんだ。パンなんか焼いたことがない。
女3　もったいない。
夫　なにがどうもったいないんだ。
女3　やろうと思えばできたでしょう。
夫　だから……空き家だったんだ、すでに。なにもなくて、今と同じ。
女3　けど、パン屋の匂いはまだ残ってる！　（女2に）姉さん、わたしたち落ち着いたら商売しよう。別にパン屋にこだわるわけじゃないけど……いや、なんでもいい。とにかくこれからは自分たちの力で生きて行かなくちゃいけないわけでしょ。
夫　盛り上がってるところすまんが、そういうことじゃないんだ。あんた（女3）にも言っておくが、わたしはあんたらの叔父じゃない。間違ってるんだ。その紙切れの住所が。
女3　え、そうなの？
女2　……。（すでに寝ている）
女3　寝てる。（女1に）姉さん、よだれ。ほらみっともないでしょ。怒られるよ、また。（とよだれを拭いてあげる）
夫　その二人を起こして早いとこ出ていってくれないか。
女3　だって寝てるでしょ。
夫　だから起こせと言ってるんだ。

青年　（現れて）師匠。あ。
夫　もうそんな時間か。
青年　ええ。
夫　（女3に）本当の叔父さんを探さないといけないんだろ？
女3　ええ、分かりました。
夫　（カップを見て）うおっ飲んでるじゃないか、俺のコーヒー。
青年　今からですか。
夫　すぐだ。（と部屋の奥へ消える）

沈黙。青年は女3を見ている。

青年　……あんたたち、あれだろ、街の方から歩いて来たんだろ。
女3　どうして知ってるの。
青年　噂になってる。村に入るところを見た奴らが言いふらしてるんだ。歩いてくるなんて、どれだけかかるんだ。
女3　一週間。
青年　汽車で来ればいいじゃないか。
女3　そんなお金がなかったの。
青年　うちの師匠の……叔父さん？　……姪なのか？
女3　違うみたい。
青年　誰か探してるのか。叔父さんか。
女3　……。
青年　この村にいるのか。手伝ってやろうか。
女3　いいわよ。
青年　探し物は得意なんだ。（と女3に触ろうとする）
女3　触らないで。
青年　別に手伝ったからって金をよこせとか、そういうんじゃない。善意で言ってるんだ。信じられないか。
女3　わたしたちで探すから。気持ちだけはありがとう。感謝する。
青年　姉妹？　ずいぶんくたびれてるな。で叔父さんを見つけるとどうなる？　いいことがあるのか？
女3　いいこと？
青年　それだけ大変な思いをしてたどり着いたんだから、よっぽどのことだろ？
女3　お金ならないわよ。
青年　違う違う。そういうことじゃない。分かった、俺がしゃべりすぎるんだな。ただ、力にはなるって、それだけは言っておきたいんだ。
女3　あ、そう。

沈黙。

青年　どこまで行くんだ？
女3　……。
青年　ここに住もうって話じゃないだろうな。
女3　……。
青年　なんにもない村だぞ。さびれていく一方だし、先月からは汽車も一日一本になった。
女3　違う。叔父さんに会ったらまたすぐ出ていく。
青年　どこへ。
女3　故郷。
青年　故郷！　俺は生まれも育ちもこの村だからな、「故郷」の感覚が分からない。それはどこにある。
女3　海の向こう。
青年　遠いな。大変な旅だ。
女3　言われなくても分かってる。
青年　親はどうした？　死んだのか。
女3　どうでもいいでしょ。
青年　俺も兄貴と二人暮らしだ。戦争で死んだんだ。
女3　……。
青年　ずっと歩いていくのか、港までは一週間じゃ無理だぞ。

青年は突然女3を押し倒した。女3は抵抗をして逃げ出そうとする。もみあいになっているところで急に青年は女3から離れた。誰かがやってくる気配を感じたからだった。

妻　（現れて）出ていくことにした。
青年　は？
妻　やっと決めたのよ。出ていく。今日の汽車はもう行っちゃったから、明日。明日までに出ていく。
青年　どうして？
妻　どうしてってそんなことあなたも分かってるでしょ。きっかけだけだったのよ、なんでもよかったの。きっかけさえあれば。だからこの人たちにはわたし感謝してるくらいよ。
青年　出ていくってどこに？
妻　街に。弟がいるんだって、前にも言ったでしょ。弟夫婦。
青年　それは聞いたけど……
妻　（戸外に向かいながら）ちょっと来て。
青年　とりあえず落ち着けよ。突然出ていくなんて。
妻　いいから来て！

妻、青年の手をとって戸外へ連れて行く。

女2　（青年に足を踏まれて）痛いっ。
女3　あの奥さん、街へ行くんだって。
女2　え、誰？
女3　奥さん。ここの。
女2　今の誰？　足を踏んだの。
女3　わたしたちのこと噂になってるんだって。
女2　噂？
女3　砂漠の向こうから歩いてきた三人の姉妹が村に来たって。
女2　迷惑な話。
女3　……今の男もすごく食いついてた。
女2　（踏まれた足を見て）あざにならないかしら。
女3　けど、ちょっと軽そう。
女2　軽いとか重いとか、そういうこと言ってる場合じゃないでしょ。
女3　（女1を指して）姉さんよだれ出てる。
女2　だから口を閉じて。
女3　もう大丈夫なんでしょ。
女2　叔父さん、探さないと。
女3　どうやって？
女2　とにかく聞いて回るしかないでしょ。
女3　……。
女2　大丈夫。
女3　あんまり聞いて回ると叔父さんにも迷惑がかかるんじゃないかしら。
女2　聞き方次第よ。
女3　ああ……雨でも降らないかな、思いっきり。土砂降り。
女2　いやよ、そんなの。
女3　わたしはここでもいいかもしれない。窓際に座って雨が降るのをながめながら、ずっと一日過ごすの。
女2　降らないわよ、雨なんか。

女3、新聞を広げる。夫、ピエロの格好をして現れる。

夫　まだいたのか。
女2　今から出るところです。
夫　出るんだな。
女2　ええ。
夫　よし……あいつは？
女2　すみません、それで、この村に弁護士をされている方がいると思うのですが。

夫　弁護士？
女２　ええ。
夫　聞いたことないな。
女２　裁判所はどこですか？
夫　裁判所？　なに、いきなり裁判でも始めるのか。
女２　そういうことじゃないんです。
夫　村長の家の裏だ。行っても誰もいないぞ。
女２　誰も？
夫　裁判なんてここ数年やったことがない。街から呼ぶんだ、裁判官を。だから弁護士もいないんじゃないか、いや、いたかな。

青年が戻ってくる。

夫　おい、弁護士ってここいたか。
青年　……。
夫　おい。
青年　え、なんですか。
夫　弁護士だよ、知ってるか。
青年　さあ、知らないですね。
夫　だよな。
青年　……。
夫　どうした？
青年　あ、メイクは？
夫　向こうに行ってする。時間がないんだろ。
青年　ええ。
夫　うちのはどこに行った？
青年　買い物に行くって言ってましたよ。
夫　せめて気持ちよく仕事させてくれないかね。家庭でこんなにもめてたら、仕事にも力が入らない。
青年　またやったんですか。
夫　やってないんだよ。勝手にあいつが怒り出して。なんだありゃ。
青年　さあ。
夫　よし行くか。

夫と青年は出ていった。

女２　わたしたちも行こう。
女３　姉さんは？
女２　このままでいい。
女３　（女１を見て）姉さんて、こんな寝顔だったんだね。
女２　……。

女２、３出ていく。

2

数時間が経過して、女1は静かに目を覚ます。夢うつつで周りを見渡し、立ち上がろうとする。

女4　（部屋の奥からティーポットを運んで現れて）あ、起きた？
女1　え。
女4　よっぽど疲れてたのね。どんなに起こそうとしても起きなかったのよ。死んだのかと思っちゃった。ぐっすり眠れた？
女1　ええ。
女4　ちょうどお茶を飲もうと思ってたとこなの。飲む？　ダージリンしかなかったんだけど、台所。
女1　あなた……
女4　ふふっ、分からない？（と部屋の奥に戻る）

女1は周りをよく見る。荷物、自分が着ているもの、部屋の壁、天井、そして戸外を覗き、女4が消えた方も。

女4　（カップをひとつ持ってきて）わたしは覚えてたわよ。ちゃんと。覚えているというか、忘れたことなんかなかった。全然、変わってないわね。変わってないってことはないけど……（女1の顔を触って）ずいぶん年が経ってるから。けど一目見て分かった。寝顔でも分かった。どう、思い出してくれた？　起きてる？
女1　起きてる。
女4　じゃあ座って。
女1　あなたの言い方は、わたしたちがずいぶん長い間会っていなかったような……
女4　だって姉さん、二十年は経つわよ。
女1　二十年？
女4　二十五年くらい。
女1　ごめんなさい。その……わたしはあなたのことを知らないみたいなの。お友達だったかしら、それとも親戚の……
女4　妹でしょ。
女1　ああ、妹。
女4　そうそう。
女1　妹ね、なるほど。
女4　姉さん。
女1　妹。
女4　妹。
女1　姉さん。
女4　思い出した？
女1　え、わたしの方が年上？
女4　お砂糖は？
女1　あ、うん。大丈夫。ありがとう。
女4　わたし入れてもいい？　めったに入れたりしないんだけど。
女1　わたしは全然。
女4　そう。（と立ち上がる）
女1　あ、ごめんなさい。その……
女4　やっぱり……覚えてない？
女1　あ、なんとなく……けど、ごめんなさい。
女4　けどほら、初めて会った気はしないでしょ。
女1　ええ。

女4は鼻歌混じりに軽い足取りで部屋の奥へ消える。

女1　（頭痛がして）あたたっ。

女1はテーブルを離れ、自分の荷物から薬を取り出そうとしている。

妻　（帰宅して）荷物をもう少し隅の方に置いてくれないかしら。
女1　あ、すみません。

妻　（テーブルのカップを見て）これ誰の？　もしかしてうちの？
女1　あ、はい。
妻　ちょっと、このカップ、わたしのなのよ。勝手に使わないでよ。ってこの葉っぱ、ダージリンじゃない。これもちょっと、ねえ、けっこう高いのよ。葉っぱ。
女1　すみません。
妻　ティーポットまで使ってる。なんでも自分のものだと思ってない？
女1　そういうことではないんですけど。
妻　思ってるからこういうことになるんじゃないの？
女1　すぐに片づけます。（薬のケースを見つけ立ち上がる）
妻　いいわよ、ちょっと。割られでもしたらたまったもんじゃないわ。
女4　（現れて）あ。
妻　誰？
女4　いや、すみません勝手に。妹です。
妻　妹？　今さっきのとは別の？
女4　そうだ、来てるのよね。姉さん！　妹はどこに行ったの？　わたしたちの妹！　あの頃は本当に可愛かった。あの子はわたしのことを覚えてくれてるかしら。お姉さんはすぐに分かったけど、あの子はどうだろう。
女1　（妻に）すみません、この薬を飲みたいのですが、あと一口だけいただけないでしょうか。
妻　あつかましい！　そんなの飲み込めばいいのよ、つばで飲みなさい、つばで。
女4　そのカップ、街で買われたんじゃないですか。
妻　え？
女4　街の表通りにある、駅の近くの。
妻　そうよ。どうして知ってるの？
女4　わたしも同じものを持ってました。
妻　そうなの？
女4　これかなり高いものでしたでしょ。わたしも手に入れるのに苦労しましたもの。これはいつごろ？
妻　三年前に買ったのよ。
女4　ええ、とても人気があるものでした。みんな欲しがるんですが、なかなか手が出ない。お手入れもちゃんとされてる。大切に使っていらっしゃるんですね。色違いもありましたでしょ？
妻　ベージュでしょ。
女4　そう。ベージュ。わたしはそれなんですよ。
妻　迷ったのよね。ずっとこれだと思ってたんだけど、いざ買うときになって迷うのよね。
女4　わたしもそうでした。
妻　今でも持ってるの？
女4　いえ。とても大切なものだったんですが、ここに持ってくるわけにはいかなかったんです。
妻　どうして？
女4　知り合いに譲りました。
妻　知り合い。
女4　そうなんです。（女1に）一口いただけば？
女1　ありがとうございます。（と茶と薬を飲んだ）
女4　二十五年ぶりなんです。
妻　なにが？
女4　姉と会うのが。
妻　二十五年ぶり？
女4　幼い頃に養子に出されまして、奉公みたいなものだったんですけど、それっきり、それ以来なんです。父親が亡くなって、母親はそれよりずっと前に亡くなっていたのですが、手紙が来ましてね。亡くなる直前に父が書いたんです。あまりにお金が無くて困った末にわたしは養子に出されて、そういう説明と申し訳ないって書いてあったんですね。もう、いてもたってもいられなくなって、わたし、その養子に出された家の家族とはあんまりうまくいってなくて。おっきな問題があるとかではないんでけど、なんとなく。それで飛び出してきちゃいました。父親の手紙に住所があったんです。ところが家に戻ったら姉さんたちは街を追放されて出ていったって言うんですね。慌

てて追いかけて、なんとか追いついたというわけです。だからあのティーセットは譲りました。割れてしまうのが一番悲しいでしょう？　ですから。
妻　大変だったのね。
女４　ここの住所が書いてあって。来てみると姉がここに寝てたんですね。
妻　寝てるのに分かるの？
女４　奥さん、姉妹ですよ。分かりますよ、ずっと会いたかったんですもの。
（女１に）ね？
女１　ええ。
女４　姉さん、よだれ出してたわよ。
女１　え、うそ？
女４　本当に。ダラーって。
女１　やめてよ、そんなこと言うの。

女４と妻、和やかな微笑み。

妻　いいわね、姉妹って。
女４　ご兄弟は。
妻　弟がね、街に住んでるの。
女４　いいじゃないですか、弟。うちは女ばっかりだから。（女１に）ね？
妻　けど、叔父さんじゃないんでしょ。
女４　なにがですか。
妻　うちの旦那。間違ってたらしいわよ、その住所。
女４　え。
女１　違うんですか。
妻　みたいね。ま、見つかるまではいればいいじゃない。二日も三日もかかるんじゃないでしょ。
女４　ええ。

妻、部屋の奥へと消える。

女４　じゃあ妹は叔父さんを探しにでも行ったのかしら。
女１　わたしも。（と行こうとする）
女４　姉さん具合悪いんでしょ。待ってる方がいいわ。妹だって気を遣ってるのよ。
女１　うん……。
女４　ねえ、わたし、家に帰ろうとしたことがあったの。家を出て一年くらいかな、もう我慢ができなくて。けど方向音痴だったからすぐに迷子になってしまったのね。家の人に見つけられて、そのときにお父さんも来てくれてた。けどお父さん謝ってばかりで、わたしには一言も声をかけてくれない。で、その時にね、自分の役割っていうのかな、それが分かったの。ああ、わたしの役っていうのは新しい家の子どもになることなんだって。
女１　つらかったでしょうね。
女４　お姉さんはどうだった？
女１　わたしは……ちっちゃな頃から病気がちで、すぐに疲れちゃうし、ずっとそんなだった。
女４　だからわたしが出されたのよ、きっと。
女１　そうなんだ。
女４　たぶんね。
女１　学校も途中で行かなくなって、料理とか洗濯とか掃除とか、家のことをずっとしてた。
女４　あ、わたしも学校行けなかった。
女１　妹は行ったわよ。
女４　本当に？　すごい！
女１　なんとかね、奨学金をもらって。頭の良い子だから。
女４　そうなんだ。あ、あれは？　庭があったでしょ、その隅に花壇が。いろんな花の種、まいてたでしょ。残ってる？
女１　わたしたちが家を出るまではね。一年中咲いてた。もう少しすればね、春の花が咲くんだけど。今は分からない。見なかったの？　家に戻ったとき。
女４　慌ててたから。中にも入られなかったし。
女１　そう。

沈黙。女1はお茶を飲む女4の顔を見ている。

女4　なに？
女1　だったかなって。
女4　なにが？
女1　妹。
女4　そうよ。
女1　ごめんなさい。
女4　みんな混乱してたのよ。家族がそろって生き延びただけでも奇跡でしょ。
　行方が分からない人がほとんどなんだから、今でも。
女1　うん。
女4　離ればなれでもみんな生きてる。それにまた会えた。

女2と3が戻ってくる。

女3　なに大丈夫。寝過ぎなんじゃない？　頭痛いの？
女1　ちょっと。
女3　薬は？
女1　飲んだ。
女2　夜になったらもう一度探しに行くから。姉さんも来て。
女1　うん。
女4　あれ？　……どっち？

沈黙。

女4　（女2を指して女1に）その方？
女1　（女3を指して）その子も。
女4　二人？
女1　そう。
女4　ええっ？
女2　どちら？
女1　妹。あなたたちの姉さん。よね？
女4　ええ……けど、妹は一人じゃ。
女3　え、どうして？
女1　なにが？
女3　どうして（女4が）姉さんなの？
女1　ちっちゃい頃に養子に出されてたらしいのね。わたしも覚えてなかった
　んだけど、話を聞いてそういえばそうかなって。お父さんが死ぬ前に手紙を
　出したんですって。
女2　なんの？
女4　他人の家に出してしまったことを謝ってくれたの。
女2　いつ？
女4　二週間前。
女2　じゃなくて、家を出たの。
女4　二十五年くらい前。

沈黙。

女3　四人だったんだ。わたし三人姉妹だってずっと思ってた。
女4　わたしもそう。妹は出かけてるって姉さんが言うから一人だと思って、
　どこに行ったんだろうって。どうして覚えてないのかしら。おかしいわね。
女3　あちこち移って逃げ回る生活が長かったから。ほら、いろんな人とごっ
　ちゃになってたんじゃない？　わたし、知らない家族のとこでよくご飯食べ
　たり寝てたりしたわよ。
女4　そうね。
女3　（女1に）姉さん、覚えてなかったの？
女1　うん……全然。
女2　養子ってどこのですか。
女4　街のね、駅の近くに貿易をやってる商人の家があって、そこ。それより。

姉さんに聞いたんだけど学校に行ってたのってあなたでしょ。ね？

女2　ええ。

女4　なんの勉強をしたの？

女2　文学です。

女4　文学？　そう。じゃあ、本をいっぱい読んだのね。立派だわ。

女2　別に偉いってことはないでしょ。

女4　そんなことない。女なのに学校行って勉強するなんて、だってめったにいないでしょ。あなたが、あなたがこれから家族を支えていくんだわ。

女2　姉さんがいるじゃない。

女4　あなたは深く考えることができるわ。

女2　そんなことないです。

女4　（女1に）安心よね。

女1　うん。

女3　ねえねえ、どうしてそっちに聞くの？　学校行ってるかどうかって。

女4　そういまお茶を飲んでるところなの。どう？　ダージリンなんだけど。

女3　あ、飲む飲む。

女4　（女2に）飲むでしょ？

女2　ええ。

女3　で「ダージリン」ってなんなの？

女4　ここの奥さんが使っていいって言ってくれたから。カップ持ってくるね。

女3　あ、可愛い！

女2　お父さんの手紙って。

女4　ん？

女2　今もあるんですか。

女4　あるわよ。

女2　ちょっと見せてもらっても……いいですか。

女1　そういうのやめなさいよ。疑ってるみたいじゃない。

女4　いいのよ。当たり前よ。いきなり出てきて姉ですって言われてもね。

女2　そういうつもりじゃないんですけど。

女3　え、けど、もう他人って感じもしないでしょ。

女4、自分の荷物から手紙を探し始めるがなかなか見つからない。そこへ妻が現れる。

妻　多すぎるわよ。（とティーセットを持っていこうとする）

女3　あ、「ダージリン」飲みたいんですけど。

妻　ふざけんじゃないよ！　さっさと出て行け！

沈黙。そして女3は号泣する。

女1　早めに出ましょう。

女2　叔父さんの家に泊めてもらえばいいわ。

女1　そうね。

女4　ちょっと……今は見つからないみたい。どこかに隠れちゃってるか。

女1　いいじゃない。ねえ、仮に手紙が無くて実はウソをついてて、赤の他人だったとしてもよ、なんの問題があるの？　盗まれるような財産があるわけでもないし。だって今夜の宿代だってないんでしょ。赤の他人なら、逆にもっと助け合っていけばいいじゃないの。（女2に）なにを疑ってるの？

女2　疑ってるとかじゃないんだけど。

女1　だったら。（泣いている女3を抱きしめる）

女4　ありがとう。本当に、なんて言ったらいいのか、わたしすごく不安で。二十五年も会ってなくて、いきなり家族だと名乗って受け入れてもらえるか、すごく、もう、怖くて。受け入れられなかったらどうしようって。

女4、荷物の中身を床にぶちまけるように出し始める。

女1　もういいから。（と女4を止める）

女4は顔をおさえている。静かに荷物の中身を戻し始める女1。女2、3は立ちつくしている。そこへ意気揚々と夫と青年が戻ってくる。

夫　お。うん？　なんだ？　増えてるじゃないか。うーん、どうだ。これはどうだ、どういうことなんだ？　お？
青年　商売でも始めるんじゃないですか。
夫　自分の荷物を売ってか！　うーん。それはいけるのか。儲かるのか。
青年　誰この人？

女たちは答えない。

夫　おーい（と部屋の奥へ消える）
青年　（女3に）なんだよ、その暗い顔。
女3　……。
青年　なんだ、泣いてんのか。ん？（と顔を触る）
女3　触らないで。（と手をはねのける）
青年　おうおう。

女3、青年の側を離れる。

青年　ちょっと、あんたたちさ、なにがあったのか分からないけどさ、暗いのはダメだよ。明るくさ、いかなくちゃ。暗くていいことある？　光は上から降りてくるもんだろ？　地面ばっかり見てても光は見つからんよ。
夫　いいから来てみろって。（と妻の腕を引っ張ってくる）
妻　だから痛いって。
夫　おい、ほら。
青年　はい。（と札束で分厚くなった封筒を取り出す）
妻　なにこれ？
夫　稼いできたんだわ。俺が。
妻　は？
夫　な？
青年　ええ。
妻　どこで？
夫　村の長老たちのパーティーだよ！
妻　どうしてこんなに？
夫　俺の芸がすごいからだよ。それだけの値打ちがあるってことだ。な？
青年　そうそう。
夫　パーティーは毎月やってるんだ。来月も呼ばれた。これだけあればなんの不自由もないだろ？　どうだ？
妻　なにが？
夫　なにがって……金だよ、金。
妻　……。
青年　じゃあ、俺の取り分もらっていきますね。（と封筒からお金をとりだそうとする）
夫　おおっ、なにしてるの、ダメだよ。
青年　どうしてですか。
夫　なんでそんなに持っていこうとするんだよ。ていうか、今日は給料日じゃないだろ？
青年　え、そうですけど。
夫　給料日に取りに来い。
青年　ええっ？　いいじゃないですか、今あるんだから。
夫　経費とか抜いてからだ。やらないって言ってるんじゃない。
青年　払ってくださいよ。
夫　払うよ。
青年　絶対ですよ。

妻が部屋の奥へと消える。夫は給料袋を持って妻を追いかけていく。

青年　（息をついて）なんなんだここは。どいつもこいつも乾ききった目をしてる。たまに雨が降ってもあっという間に吸い込んで水は結局行き渡らない。吸い込んだその場所が独り占めしてるんだ。
女3　雨は降らないの？

青年　雨？　降るんだったらもっと草木があっていいだろう。ここの水は枯れていくばっかりだ。（と出ていく）

沈黙。

女１　夜になったら行くのね。
女２　え、うん。そう。
女３　まだだいぶ時間がある。
女２　お腹空いたでしょ？　クッキーがまだ残ってるから。（とカバンの中からクッキーを取り出す）
女３　わたし要らない。ちょっと行ってくる。
女２　なにしに。
女３　散歩。（と青年を追って出ていく）
女１　わたしも今は大丈夫。（とクッキーを受け取らない）
女４　わたしはいただくわ。これはどうしたの、あなたが焼いたの？
女２　ええ。
女４　（一口食べて）おいしい。
女１　得意なのよ、この子。お店開かないかって話もあったもんね？
女４　すごいじゃない。
女２　そんなの聞いたことないわよ。
女１　あったじゃない。学校の友達が遊びに来たとき言ってたの、わたし覚えてるわよ。
女２　そうだったかしら。

夫、古汚いバケツを持って現れる。

夫　広場の井戸まで行って、水を汲んできてくれないか。

沈黙。

夫　いきなり入ってきて、勝手に台所まで使ってるんだ。そのくらいのことしていいだろ。妻のダージリンまで飲んだらしいじゃないか。それか今すぐ出ていくかだ。妻がいいと言ったからって俺はまだ許したわけじゃない。許す道理なんかないからな。だいたい……
女１　わたし行きます。
女２　いいよ、姉さん。わたし行くから。
女１　ずっと寝て元気になったから。外も歩いてみたいし。
夫　汲んだ水は裏口に持ってきてくれ。
女１　広場ですか。
夫　真ん中に井戸がある。そろそろ混む時間だから早くな。（とバケツを置いて部屋の奥へと戻る）
女２　（自分が行こうとして）やっぱり、重いから。
女１　（女２を制して）たまには運動もしないと、まだ先も長いんだし。

女１はバケツを持って出ていった。

女４　あなたは落書きばっかりしてた。
女２　え。
女４　壁にもちゃぶ台にもあちこち。はじめはお父さんとか、お母さんとか、わたしたちの顔。そのうち字を覚えるようになって、絵にことばが付いた。あなたは字を書くのが好きだったわ。
女２　そういうことはまったく覚えてないの。
女４　じゃあなにを覚えてるの？
女２　ちっちゃな頃はもう本当に毎日が必死だったから。隣の家に突然爆弾が落ちたことがあったでしょ。死にものぐるいでみんな逃げて、わたしはお母さんに抱きかかえられたのを覚えてる。
女４　けど終わったじゃない？
女２　静かになったけど生活は変わらなかった。だって街に戻ったらほとんど焼け野原になってたのよ。自分たちの家がどこにあるのかも分からなかった。
女４　わたしはお父さんと家をつくる材料を集めて回ったわ。

女２　息をつく暇も無かった。不安ばかりで。
女４　それでもみんながいっしょにいたから。
女２　……。
女４　夜空を見上げることができなかったのよ、怖くてね。真っ赤に燃えた火がまた落ちてくるんじゃないかって。そのうちに家ができて、その夜にお父さんが屋根に上って、みんな付いていったけど、わたしだけダメで。そしたらお父さんが無理矢理。抱えられて、すごく抵抗したんだけど、空を見せられた。星がね、きれいで。なんか大きな彗星が見える日だったのね。もうなにも落ちてこないよって、大丈夫だよって。こわごわと目を開いて夜空を見たわ。星がいっぱいで、大きな流れ星がゆっくりと空を横切っていて。そしたら今度は逆の感覚。すーって空に吸い寄せられるようになったの。
女２　その彗星は見た。何十年かに一度だけでしょ。
女４　その後でわたしは家を出されたから、その時のことが一番、こう、暖かいのよ。

妻が紙とペンをもってテーブルでなにか書き始める。

女４　叔父さんがいるの？
女２　そう。
女４　叔父さんのところに住むの？
女２　そうじゃないわ。

沈黙。

女４　え、なに？
女２　……お父さんは自分が死んで、わたしたちが街を追放されることになったときのことを叔父さんに頼んでたの。わたしたちを故郷へ送り届けるようにって。
妻　あなたたち東の人間なんでしょ。

沈黙。

妻　いいのよ、隠さなくて。わたしは別に構わないんだから。東も西も。
女２　父はそうなんですけど、母は西なんです。
妻　だからいいんだって。純粋な東でも、東と西の半分半分でも。安心して。そういうことで追い出したりしないから。（顔を覗かせた夫を見つけて）だから入ってこないでって言ったでしょ。まだ書いてるんだから。
夫　落ち着いて話をしようよ、とにかく。
妻　わたしは今この人たちと話をしてるの。邪魔しないで。それよりも水汲んできてって言ったでしょ。早く行ってよ。

夫、奥に引っ込む。

妻　わたしはあの人の浮気を怒ってるんじゃないの。怒らない訳じゃないけど、それで別れようとまでは思わない。あの人はね、全然モテナイの。いろんな女に声をかけまくって言い寄るんだけど結局モノにはできない。とても落ち込んで、もうやめるとか言って、けれどもまた声をかける。ねえ、男も女もそうだと思うんだけど、身の程をわきまえるって大切なことでしょ。自分をよく知るというか。うんざりなのよ。がっかり。誇りをもてないのよ、わたしたちの関係に。そのうちわたし自身の誇りも失ってしまうみたいで。あれでも昔は腕のいい大工でがんばってたのよ。怪我するまでは。だって、ねえ、大工を旦那に持つ家族がよ、ボロボロになった空き家を探してまわらないといけないってあまりにも哀しいじゃない。

弁護士が現れる。

妻　あ、先生。
弁護士　どうも。
妻　どうしてわざわざ。今、ほらちょうど書いてたんですよ。
弁護士　そうか。

妻　約束は明日じゃありません？
弁護士　今日は違うんだ。この人たちに会いに来たんだよ。
妻　は？
弁護士　わたしはあなた方の叔父さんの弁護士だ。

沈黙。

女２　あなたが叔父さんですか。
弁護士　わたしじゃない。わたしは弁護士だ。
女２　叔父さんは。
弁護士　叔父さんはいまこの村にはいない。仕事で遠くへ行っている。叔父さんはわたしの客なんだ。君たちがわたしの顧客の姪であることが確認できれば、切符とお金を渡すということになっている。なにか書類は？
女２　書類ですか。
弁護士　そう、君たちがお父さんの娘であることの証拠があればいいだろう。
女２　それはたとえばどんな？
弁護士　出生証明書だとか、なにかしら裁判所が発行したものがあればそれでいいんだが。
女２　あの……すみません、そういう書類はないんです。写真ならあるんですけど。
弁護士　見せてみなさい。

女２、荷物の中から写真を取り出して見せる。

女２　これが父で、これが母です。姉、妹、わたし。

弁護士は写真と女２、４を比べてみる。

弁護士　これがあなた？
女２　いや、わたしはこれです。
弁護士　うむむ。
女２　わたし、父から叔父が弁護士なんだと聞いてました。ちょっとびっくりしちゃって、すみません。
弁護士　聞き間違いか、言い間違いだろ。
女２　はい。
弁護士　しかし、これは……
女４　わたしは？
弁護士　あなたはこれだろう。
女２　いえ、あの……。
弁護士　はい。
女２　こちらの方は写っていません。
弁護士　え、だって、これ姉妹だろ。
女４　四人なんです。
弁護士　四人？

沈黙。

弁護士　聞いてないな、そんな話。
女２　わたしたちもここでさっき知ったんです。
女４　幼い頃に家を出されまして。
弁護士　養子？
女４　ええ。
弁護士　じゃあ、あなたは姉妹ではない。その養子に出された家の娘だ。
女４　違うんです。その……正式には養子じゃなくて、書類の上では同じ家族のままなんです。
弁護士　どうして分かる？
女４　父が教えてくれました。わたしも写真を持っています。
弁護士　出しなさい。
女４　（荷物から写真を取り出しながら）父からの手紙も持っています。いまちょっと荷物にまぎれてどこにあるのか分かりませんが、それは確かなこと

です。
弁護士　（女２に）本当に姉妹なのかね。
女２　たぶん、はい。
弁護士　どうして分かる？
女２　小さい頃の思い出が、同じところがあったので。
女４　（写真を持ってきて）これが父と母、姉妹三人です。
弁護士　（二枚の写真を比較して）みんな同じ顔に見える。
女２　そういう時代でしたから。
弁護士　しかも結局どっちも三人じゃないか。こっち（女４）の写真は誰が欠けてるんだ。
女４　分かりません。

沈黙。弁護士は二枚の写真を比較している。女４の写真は頻繁に回転させられている。

女２　（女４の写真を見て）こっちのお父さんは微妙に太ってますね。
弁護士　そういえば。
女４　（女２の写真を見て）人間太ることもあるわ。それよりお父さんは一重でしょ。一重まぶた。
女２　ええ。
女４　あなたの写真では二重になってる。
弁護士　そうか。
女４　ここのところよく見てください。ほら。
弁護士　そういえば。二重か。一重？　いや二重だ。
女２　がんばってたのよ。
女４　なにをよ。
弁護士　目が痛くなってきた。
妻　お水、持ってきましょうか。
弁護士　目が痛いんだ、わたしは。（写真を突き返して）これだけではなんとも言えない。大切なことは、汽車と船の切符と旅費は三人分しかないということだ。
女２　三人ですか。
弁護士　そうだ。
女２　それは、その……増やしてもらうわけにはいかないのでしょうか。
弁護士　金を出すのはわたしではない。あなたがたの叔父なんだ。彼は三人分だとはっきりわたしに言った。わたしは彼の指示どおりに動くだけだ。とにかくはっきりさせてもらわないと困る。続きはまた明日にしよう。
女２　もう一人分をお願いできないか聞いてもらえませんか。もちろん、これが特別なお願いであることは分かっています。けれどわたしたちも知らなかったんです。
弁護士　三人は三人。わたしは今日解決できなかったという報告をするだけだ。忙しいんだ、わたしは。
妻　先生、書類はこれでいいんでしょうか。
弁護士　明日だ。とにかく明日。（と出ていく）

妻、書類を持って弁護士を追う。

女４　……叔父さんも事情を知れば四人分、なんとかしてくれるんじゃないかしら。会ったことないけど。
女２　……。
女４　ありがとう。頼んでくれて。
女２　とにかくわたしたちは新しいところにたどり着かなければならないの。汽車に乗る。港につく。そして海を渡る。海の向こうの新しい土地。そこが故郷だと言われてるけど、わたしたちの記憶にはもう残ってない。向こうを離れたのは一番上の姉さんが赤ちゃんの頃だから。わたしはまだ生まれてもないのよ。そこにはおじいちゃんとおばあちゃんが住んでいる。わたしたちはそこで新しい生活を始めるの。とにかくね、本当にね、落ち着くということが大切。わたしはただそれを望んでるだけなの。誰にも侵されない、多少の敬意を払って認められる場所。
女４　わたしも賛成だわ。

妻　（現れて）お姉さんが倒れてるわよ。外。

女2と4、慌てて外へ出る。

妻　（部屋の奥へ向かって）ねえ、あんた！　あんた！

夫　（待ってましたと飛び出てきて）お、なんか呼んだかな。

妻　水を汲みに行ってと言ったでしょ。わたし。

夫　水汲みな。すぐ行くよ。

妻　どうしてあのお姉さんがバケツ持ってるのよ。あんた、行かせたでしょ。

夫　え？

妻　そこに倒れてるわよ。水、ひっくり返して。もったいない。

夫　それはだな、あの女が自分から行くって言ったんだ。せめてそのくらいはさせてくれって。

妻　だからって行かせるわけ？　わたしはあなたに言ったのよ。

夫　いいじゃないか。金を持ってるわけでもないんだから、労働するしかないだろ。あの女が無理なら妹とかいう女たちが代わってやればいいんだ。

妻　あきれた。あなたのベッドに寝かせるわよ。

夫　え？

女4　（現れて）毛布かなにか。

妻　裏口から奥の部屋に。ベッドがあるから。

妻と女4、出ていく。

夫　ふん、出ていくなら出て行け。別れたいなら別れてやるさ。俺はここにずっと残る。やっと手に入れた土地と家なんだからな。裏の畑だってもっとちゃんとすれば野菜だってできる。お前はなにもかも失ってしまうんだ。それに気が付いても後の祭り。どんなに泣きついても知らないからな。どいつもこいつも……馬車にひかれて死んでしまえ！　馬に蹴られて死ね！　汽車の急ブレーキで頭ぶつけておかしくなってしまえ。どうだ、参ったか。バカめ！

夫は部屋の奥へ。

夫の声　勝手に俺の家に入りやがって。

コーヒーと新聞を持って出てくる。

夫　いつでも追い出してやるからな！

イスに座り新聞を広げる。

3

女5が荷物をもって現れる。片手には手紙がある。

女5　（手紙を示して）わたしは字が読めません。だから「手紙」というものとは生涯無縁で、そのような人生になるのだろうとずっと思っていました。誰かに想いをはせて封を閉じることも、誰かの想いを待って封を切ることもないのだろうと。だから突然に父からの手紙が届いたときにはどうすればいいのか途方に暮れました。わたしを見つけ出して手紙を届けてくれた人にどのようなお礼をいえばいいのかも分からなかったのです。田舎の貧しい孤児院ですから、わたしに手紙が届いたと聞いて子どもたちは大騒ぎです。わたしはいよいよ暗い気持ちになります。そこにどんなことばが込められているのか、どんなに目をこらしても聞こえてこないのです。わたしは、ことばは耳で聞くものだとずっと思っていました。目で見ることばを知らなかったのです。その手紙は院長先生にお願いして読んでもらいました……あの時の感動と言ったら！　父の声が聞こえる。手紙の中に封じ込められた父の声が次々とよみがえってくる。文字に乗っていつまでもどこまでも届くことば。突然、わたしの前には新しい世界が広がるかのようでした。涙が止まらない。静かに流れる涙がいつまでたっても止まらない。窓から射す昼下がりの鈍い光が、その時だけはとても輝いて見えたのです。……あなたが読んでいるのは新聞ですか。わたしは院長先生に文字の読み方を教わりました。まだ新聞に書かれていることは読めないのですが、けれども、そう、天気予報は分かります。わたしの村はいつも曇っているところでしたが、そうだと分かっていて、それでもいつもわたしは新聞の天気予報欄を楽しみに読んでいました。わたしは父の手紙を受け取って決心しました。自分が育ったその孤児院を出て、初めて村の外へ出て、旅立つことを決めたのです。あの場所はわたしのすべてでした。つらいことも楽しいこともすべてがありました。院長先生や他の子ども達との別れもとても悲しいことでした。それでもわたしがここに来たのは、血のつながった姉たちがいるからと、父がそう教えてくれたからなのです。わたしの大切な人たちはもう着いていますか？

夫　……は？

女5　わたしの姉たちはまだ着いていませんか。

夫　お前もか。

女5　え？

青年　（現れて）あれ、またお客さんですか。

夫　いや。

青年　（女たちの荷物を物色して）さぁて、どれかなどれかな。

夫　なにしてるんだ？

青年　いや、ちょっと。

夫　ちょっとってなんだ。

青年　ちょっとはちょっとですよ。

女3　（現れるや誰も姉たちがいないことに）あれ？　あ、ちょっともう、いいから、自分で持っていくから。

青年　いいんだよ、お前は。じっとしてろって。

女3　いい男ぶっても意味無いんだから。余計なことしないで。

青年　人の親切は素直に受けろよな。

女3　それ、わたしのじゃない。

青年　あ？（と持っている荷物を戻す）

夫　おやおや、どこへ？

女3　ちょっとここは手狭だし、この人の部屋、空いてるからって。

夫　お前の？

青年　一晩泊めてやるくらいならいいかなって。明日には追い出しますよ。

女3　偉そうに！

青年　一晩だけという約束だ。

女3　姉さんたちはどこに。

夫　え、（部屋の奥を指して）こっちかな。

女3　なかに？

青年　おい、行こうぜ。

女5　姉さん。

女3　は？

女5　街を追放されてここまで来たのですか。

女３　え、なに？
女５　これから故郷に帰るのですか。
女３　誰？
女５　あなたの妹です。きっと。
女３　妹？

沈黙。

女３　え、どうして？
女５　お父さんからの手紙をもらいました。ほらこれ。（と渡す）
青年　（女３に）お前が一番下じゃなかったの？
女３　そうよ。
青年　あんたいくつ？
女５　二十三です。
青年　ああ。あんたも姉妹なの？
女５　わたしも知らなかったんです。その手紙を受け取るまで。
青年　どこから来たの？
女５　ずっと北から。
青年　歩いて？
女５　ええ。
青年　よかったな。妹がいて。な？
女３　（手紙を読みながら）そういう問題じゃないでしょ。
青年　心強いじゃないか。女が五人もいれば生きていけるよ。
女５　え？
青年　あと、三人いるんだ。
女５　三人ですか。
青年　だから五人の姉妹。
女５　そんなに？
青年　しかもこの人（夫）は叔父さんじゃない。
女５　え？
青年　住所が書いてあったんだろ、それ間違ってたんだ。
女５　じゃあ、この人は。

沈黙。

夫　疲れた。
女３　ダメだ。
青年　なにが？
女３　わたし、字が読めないんだった。（と青年に手紙を渡す）
青年　なんだよ。
女３　違う人なんじゃない？
女５　どういうことですか。
女３　世界に姉妹はいくらでもいるでしょ。それがわたしたちだとは限らない
　し。この村にだっているでしょ、他にも。
青年　肉屋の娘もそうだ。女ばかりの三人だ。
女３　あなた字読めるの。
青年　当たり前じゃないか。
女３　ふーん。
青年　惚れた？
女３　きっとその肉屋よ。肉屋の娘なのよ、あんたは。四人目の。
女５　いや……
女３　連れて行ってあげる。行きましょ。（と女５を押す）
女５　（女３を突き飛ばして）ちょっと待ってください。違います。わたしは
　ここに来るように言われたんです。間違ってるはずはありません。
女３　誰に？
女５　弁護士さんです。叔父さんの。
青年　弁護士？　いたのか、この村に。
女３　どうしてあなたが言われるのよ。
女５　わたしを探してくれたのが、この手紙を届けてくれたのがその弁護士さ
　んなんです。

夫　弁護士になるのは難しい。
青年　なんですか。
夫　俺の遠い親戚も弁護士を目指してがんばってたんだが、結局挫折した。数え切れないくらいの法律を覚えるのも苦労したんだが、それよりも法律をうまく使いこなすことができなかったらしい。技術がいるんだな。解釈や組み合わせ、タイミング。今では学校の教師をしてるよ……。俺は疲れた。もう寝る。
青年　お疲れ様でした。明日はお休みです。
夫　分かってるよ。今月の仕事はもう終わりだろ。一ヶ月休暇だ。（気が付いて）そうじゃなかった！　違う、俺のベッドには女が寝てるんだった！
青年　誰ですか。
夫　働くこともできない。落ち着いてコーヒーも飲めない。ゆっくり休むこともできないのか、俺は！（とその場で寝てしまう）
青年　師匠、師匠。

女3に続いて女5が部屋の奥へ行こうとする。

青年　おいおい、あんたはまだダメだろ。
女5　え？
青年　あんたはまだ認められたわけじゃない。
女5　認められるってなにを？
青年　あんたがいったい誰なのか。
女5　その手紙に書いてあるでしょ。
青年　ああ。
女5　返してもらえますか。
青年　ん？
女5　手紙を。返してください。（と青年から奪い返すように取る）わたしは一人きりなんだと思っていた。もうあきらめていたんです。けれども家族がいると知らされた。血のつながった姉妹がいる。わたしはそのつながりの一部なんです。誰の記憶にも残っていないかもしれません。わたし自身もそうです。けれども、ねえ、記憶にあることがすべてですか。記憶にないけれど確かにあるということもあるんじゃないですか。わたしは心のどこかでそうしたものをずっと信じて生きてきたんだと気が付きました。そしてそれをもらったんです……海の向こうに故郷があるのだと。ほらここです。「故郷」と書いてある。その新しい土地でわたしは新しい生活を始めるつもりで来ました。いまわたしに必要なのは認めてもらうことじゃなく、姉たちと出会うことなんです。
青年　だからそれが肉屋のことかもしれないだろ？　肉屋のところもあと一人足せば四人姉妹だ。
女5　わたしはいまここにいるんです。
青年　そうムキになるなって。

女2、3、4が部屋へ入ってくる。

女3　ほら、その人。
女2　弁護士さんに言われたの？
女5　ええ、ここで待つように。いま事務所は忙しいからって。
女2　手紙は？
女5　これです。
女2　ちょっと、いい？
女5　え？
女2　手紙、見せてもらっても。
女5　ええ、どうぞ。

女2は手紙を読み始める。

女3　北から歩いて？
女5　はい。
女3　なにしてたの？
女5　孤児院で小さな子どもたちの世話をしていました。わたしもそこで育っ

たんです。
女3　いつから？
女5　赤ちゃんの頃に家族とはぐれて届けられたんだって聞きました。
女3　（女2に）お父さんの手紙？
女2　え？
女3　お父さんからなの？　それ。
女2　……。
女4　わたしもお父さんから手紙をもらったの。商人の家に奉公に出されてね。
　姉さんや妹が街を追放されて故郷に行くことになるんだと知って飛び出して来ちゃった。
女5　そうなんですか。
女4　あなたはきっとわたしたちのなかで一番つらい思いをしてる。
女5　……お姉さんもきっとそうなんでしょうけど、わたしはこれからのことで頭がいっぱいなんです。
女4　そうね。
女5　でしょ？
女4　例えば？
女5　わたしはまだ字があまり読めないんです。その手紙を読むために勉強を始めたところだから……ことばをもっと知りたいと思っています。
女4　わたしも学校には行けなかったのよ。ずっと働いてたから。召使いじゃなかったけど、休みなんかなかった。（女2を指して）この子はね、文学を勉強したのよ。ね？
女2　ええ。
女5　文学。
女4　うらやましいでしょ。
女5　文学？
女3　働かないといけないでしょ。向こうにはおじいちゃんとおばあちゃんがいるのよ。養ってもらうわけにはいかないんだから。
女4　なんでもするわよ。
女5　ええ。
女3　わたし、店を開きたいの。なんでもいいんだけど、できればパン屋がい
　い。ちっちゃい頃から憧れてたのよね。
女4　小麦粉あるかしら。
女3　あるわよ小麦粉くらい。
青年　おい、いつまで待たせるんだ。
女3　ちょっと待ってよ。
青年　ずっと待ってる。
女3　いいじゃないの、少しくらい。だったら荷物お願い。
青年　荷物運びか俺は。（と出ていく）
女3　……なにいきなり。（と青年を追う）
女2　（手紙を読み終えて）これを弁護士さんが持ってきたの？
女5　ええ。すぐに叔父さんのところへ、この村においでと言ってくれたんだけど、そんなすぐには離れられないでしょ？　できるだけ早く来たかったし、なによりお姉さんたちに会いたいって思ってたんだけど。
女4　みんな今日着いたのよ。たいして遅いわけじゃない。
女5　良かった。叔父さんは？　叔父さんの家に行けばいいんじゃない？
女2　いまは仕事で遠くに行ってる。
女4　手紙は？
女2　（女5に返して）確かにあなたの言うようなことは書いてあるけど、わたしには分からないわ。
女5　これは偽物なんかじゃありません。
女2　そうね、これは手紙よ、確かに。……けどここに書かれてあることがわたしたちとどう……関わっているのか、なんとも言いようがないのよ。
女5　弁護士さんが持ってきてくれたんです。
女2　あの人ね。
女5　お会いになりました？
女4　今さっきもここに来てたのよ。
女5　叔父さん……けどここは違うんですよね、この家は。どこですか、ここは。
女4　わたしにもよく分からないの。みんながここを叔父さんの家だと思って、

けど、実際にいたのはそのくたびれた男の人と奥さん。

女2は外へ行こうとする。

女4　ねえ。
女2　なに？
女4　厄介者なのかしら、わたしたちって。
女2　え？
女4　突然現れて姉妹だって、切符は三人分しかないのに、わたしたちさえいなければ、何事もなく出発できたのにって。
女2　思ってないわよ、そんなこと。
女4　本当に？
女2　どうしてそんなこと聞くの？
女4　とても不愉快そうな顔をしてる。

沈黙。

女2　そんなこと思ってないわよ。

女2が出て行き、すぐに女1が現れる。

女1　あなたが父さんから手紙をもらった……？
女5　はい。
女1　あの子たちは？
女4　出ていった。
女1　（夫を見て）ずっと寝てるの？
女5　ええ、さっきから。
女1　わたしがベッドを使ってたせいね。
女5　具合が悪いんですか。
女1　ちょっとフラッとしちゃって。少し横になってたの。
女5　ああ。
女1　手紙、読ませてもらえる？
女5　はい。

女1は手紙を受け取り読み始める。
女4は写真を荷物から取り出した。

女4　姉さん……。
女1　なにこの写真。
女5　その荷物の中に。
女4　わたしが持ってきたの。
女5　これが姉さんかしら。
女1　みんな同じ顔に見える。
女5　母さんも若いのね……。
女1　戦争が終わって街に戻って家を建てたの。やっとこれから落ち着けるんだって安心したんだろうね。家が建った次の朝、静かに眠ったままだった。
女5　家は？　今。
女1　さあ、誰か知らない人が使ってるか。取り壊されてるか。わたしたち、あまりそのことを考えないようにしてるの。だって、ねえ、あまりにもあそこはいろんなものが一杯だったから。
女4　（窓の外を見て）あれは竜巻かしら。
女1　なに？
女4　ほらあれ。
女1　こっちに来たりしないのかしら。
女4　あんなに空高く、いろんなものを巻き上げて。
女1　誰も抵抗できないんでしょうね。
女4　巻き上げられたあとってどうなるのかしら。
女1　さあ。
女4　一気に落ちて地面に叩きつけられるのね。

女1　こっちに来ないかしら。
女4　大丈夫よ、どんどん遠ざかってる。手紙はどうなの？
女1　うん……そうね、あなたもね、きっと妹なのよ。
女5　ええ。

三人、少しのあいだ遠くの竜巻を見ている。

女5　わたしも自分がいた村から東の人間が追放されるのを何度も見た。村のために役に立つ間は誰もなにも言わないのね。たとえばそう、父親が死んで家族の守りが薄らいだ時に、なにかが動き始める。誰が言うともなく告発されて、誰が裁くともなく判決が下って、執行官だけが出てきて最後に通達するのよね。どんなに抗議をしても覆ることはない。そして彼らが出ていけばなにごともなかったように村の日常は続いていくの。孤児院のなかでは東も西も関係なかった。だって親が分からないんですもの。わたしだって東の人間だってその手紙で初めて知ったのよ。
女4　西の人間だと思ってた？
女5　考えたこともなかった。
女4　東だと分かってどうだった？
女5　……。
女4　わたしはいつもいじめられてた。東が戦争に負けていけばいくほど。よほどわたしたちは恨まれてたのね。
女5　けど、姉さん、わたしはその家で会いたかった。姉さんたちに。父さんや母さんが過ごした部屋とか、台所とか、みんなが歩いた廊下とか。触ってみたかった。庭はあった？
女1　狭いけどね。
女5　みんなが過ごした場所にわたしも少しでいいから、いてみたかった。

女1は手紙で顔を押さえている。

女5　故郷に帰れば、東も西も関係ない。そうでしょ？　そこはずっとわたしたち姉妹にまとわりついていたしがらみから解放される場所なんでしょ。

女5、静かに女1を抱きしめる。

女5　はやく会いたかった。

夫のいびきが響いている。

妻　（現れて女1に）もう寝てなくていいの？
女1　ええ、すっかり。もう元気になりました。
妻　そう、その人も妹さん？
女5　はい。
妻　そんな気がしたのよ。

4

夫が目を覚ますとすでに数十分が経っていた。
女1から5と弁護士が側で話し合いをしていた。

弁護士　冗談じゃない。次から次に結局五人だ。五人分の切符と旅費など出せるわけがない。
女2　とにかくそれを叔父に聞いていただきたいんです。
弁護士　だから、あなたがたの叔父がそう言っているんだ。嘘つきがいる。あるいは自分が姉妹の一人だと思いこんでいる者がいる。四人なら考えようかという時に、次が来た。彼は疑いを持つということを知らない。わたしが忠告したとおりだ。
女5　ごめんなさい。
弁護士　あなたが問題なんじゃない。あなたはただ到着が遅れただけだ。
女3　叔父さんが間違ってるかもしれないんじゃない？
弁護士　ありえない。あなたたちのお父さんが姉妹は三人なんだと伝えてきたんだ。その手紙をわたしも読んでいる。わたしたちに預けられたお金もその人数分だけだったんだ。
女3　なんでも断定的に言う人ね。そんなに確かなことってあるの？
女2　（女3を制して）ちょっと。
妻　（現れて）先生、わたしたちの方はどうなるんですか。
弁護士　今はあなたたちのことで来ているんじゃない。明日だと言っただろう。
夫　なんだわたしたちのことって。
妻　土地と家のことがあるでしょ。どう分けたらいいのか先生に相談してるところなのよ。
夫　どうしてそんな相談する必要がある。
妻　だって別れるんだから。
夫　俺は別れるなんて言ってないぞ。
妻　わたしが決めたの。
夫　お前が決めたら決まるのか。
弁護士　問題はあなたにあるんだ。反論の余地はない。
妻　ほら。
夫　ちょ、ちょ……土地と家を分けるってどういうことだ。俺のものだろう。
妻　そういうと思った。だから先生にお願いしてるんじゃない。

沈黙。

夫　みんな出ていってくれ。ここは俺の家なんだ。みんなだ！　俺の家から出て行ってくれ。

誰も出ていこうとしない。どうしようもなくなって夫が出ていく。

妻　（出ていく夫に）水だったら今さっきわたしが汲みに行ったわよ。
女2　（せきをする女1に）大丈夫？
女1　大丈夫。
女3　寝てたら？
女1　大切なことだから。
弁護士　とにかく一つずつ確認していかなくてはいけないだろう。（女1から3に）あなたたちはいっしょにここまでやって来た。
女2　そうです。父の死を看取ったのもわたしたちです。街を追放されるまで裁判を闘ったのも、家を閉めて出てくるときも、いつもわたしたちはいっしょでした。
弁護士　確かかね。
女1　本当はわたしが三人を引っ張っていかなければならないのに、わたしがこんなことですからいつも妹たちに迷惑を……
女3　姉さん、今はいいの、そんなことは。
弁護士　けれどもそれはあなた方が姉妹であることとは関係がない。
女2　どうしてですか。
弁護士　ただいっしょにいたというだけでは、姉妹とまでは言えない。
女2　だって幼い頃からずっとですよ。
弁護士　話はまた後で聞こう。（と女4を見る）

女４　手紙を見つけました。先ほどは荷物に紛れ込んでいてお見せできなかったものです。
弁護士　見せなさい。
女４　あの子（女５）の手紙と筆跡が同じです。ほらサインも。
弁護士　分かったから。わたしが見るんだ。
女３　（女２に）ねえ、わたしたちには手紙はないの？
女２　わたしたちは父さんから直接聞いたんでしょ。

沈黙。みんな手紙に目を通す弁護士を見守っている。

弁護士　確かにこの手紙は本物のようだ。そうするとあなた（女４）は確かだということになる。
女４　ええ。
女５　わたしが間違えなのかもしれません。一番このなかでは記憶がないんですもの。お姉さんたちがいたことさえ覚えてない。お父さんやお母さんの記憶だってないんです。まったく別の姉妹の一人だったとしても不思議じゃありません。
弁護士　あなたはわたしが探した人だ。あなたが違うということはわたしが違っているということになる。わたしは顧客の、つまりあなたの叔父の指示通りに動いたんだし、その叔父はあなた方の父親から指示を受けている。つまり、あなたが違うということは父親が間違っているということになる。
女３　どうしてその子だと分かったの？
弁護士　右肩の後ろに大きな傷があるのと、その側にほくろが二つ。
女３　見せて。
女１　やめなさい。

女３は女５に迫り肩の傷とほくろを見た。他の女たちものぞき込んでいる。

女４　生々しいわね。空襲の時？
女５　そう。わたしは覚えてないんだけど。
弁護士　ずっと北にあるその村で、そういう特徴をもったそのくらいの年齢の女性は彼女だけだった。……どうだろう、すべてははっきりしたと言えるのではないですか。
女２　どういうことですか。
弁護士　あなた方（女１から３）が姉妹であるというのは、あいまいな記憶だけがたよりだ。それに比べてこの二人（女４と５）には確かな証拠がある。
女４　わたしは……いいですか。
弁護士　どうぞ。
女４　家族で過ごした記憶もあります。
弁護士　つまり、あなたたち（女１から３）が姉妹であるのはほとんど思い違いにすぎないんだ。あと一人だけ。あなたたち三人の中から一人だ。
女２　すみません。
弁護士　なにか。
女２　裁判所の記録を調べてもらえればはっきりするのではないですか。
弁護士　挑戦とはまさにこのことだ！　あなたはわたしが弁護士であることを忘れていらっしゃるのではないですか。
女２　あなたが弁護士だから聞いているのです。
弁護士　それならばお教えしましょう。裁判所に行けば確かに家族の構成がどうであるかはっきりするでしょう。しかしどうやってその情報を手に入れるかだ。簡単に言うならば途方もなく複雑な手続きが待っています。数ヶ月なら幸運だが数年かかってもおかしくない。わたしはごめんだ。それにたとえ時間をかけて情報を得たとしてもですよ。そこに書かれてある人間があなたたちであるということを。どうやって確かめるというんです？　訴訟でも起こすというのですか。徒労とはそういうことだ。
妻　こんな小さな村で裁判所の話を聞けるなんて夢にも思わなかった！
弁護士　他に質問があれば？

沈黙

弁護士　とてもばかげてはいるが仮にあなた方が裁判を起こしたとする。この件で。想像してごらんなさい。法に照らし合わせたところで、父親が直接書いた手紙を持っている方が勝つに決まっているじゃないか。目に見えるものだけがすべてだ。裁判官というのは想像力というものからもっともかけ離れたところにいる人たちなんですよ。

女２　けど、わたしたちは今までも確かに姉妹でした。

女４　三人のなかで二人が違うとして、その二人はどうなるんですか。

弁護士　きっとその二人にはどこかに家族がいるんだろう。探せばいいじゃないか。（女５に）あなたにお願いしてもよいですか。

女５　ええ、もちろんです。

弁護士　最後の一人が誰なのか、はっきりしたら知らせてください。できますか。

女５　はい。

弁護士　（女４に）あなたも協力してあげてください。（女１から３に）正直に告白なさってはどうですか。思い違いを責める人は誰もいませんよ。じゃあ、後はよろしく。（と出ていく）

沈黙。

妻　ねえ、わたしたちの力だけではなんともならないことってあるのよね。わたし、自分がその時々の感情だけで生きているんだってことが分かった。世の中のほとんどのことはわたしたちの知らないところで動いているのよ。あの人はきっと、とてつもなく深い絶望のなかにも網の目を張り巡らせているんだわ。わたしたちが迷い込んでしまわないように。

女５　（妻に）すみません。

妻　なに。

女５　水を一杯いただいてもいいですか。

妻　ええ。（と妻部屋の奥へ）

沈黙。

女４　わたしたちも協力するから。

女３　そんなこと分かるわけない。思い違いなんかじゃない、だってわたしたちがいっしょに過ごしてきたのは確かなことでしょ。

女４　それを確かめようというんじゃないの。あなたはいつからいた？

女３　どういうこと？

女４　いつからこの「姉さん」たちといっしょにいた？

女３　いつからって、ずっとよ。

女４　記憶を遡っていくのよ。どこかで行き止まりがあるでしょ。何歳くらいまで行く？　そこから始めましょうよ。

女２　ちょっと待って。ねえ、わたしたちは生活をしていただけなの。それは確かに。あの街で、あの家で、あの庭で。

女４　じゃあ、庭の隅に花壇があったでしょ。あなたたちが家を出るとき、最後に咲いていた花の色は？（女３に）どう？

女３　……黄色。

女４　（女２に）あなたは？

女２　答えたくない。

女４　（女１に）姉さんは？

女１　白……かしら。

女４　ね。あなた（女２）が黄色と白のどちらを答えたとしても、三人の記憶はずれている。だってたった一週間前のことでしょ。

沈黙。

女４　（女５に）あなたからはなにかないの。

女５　だってわたしは聞きようがないんだもの。みんなといっしょにいなかったんだから。あなたにお願いするわ。

女４　焼け野原に新しい家を建てた日のことを覚えてる？　夜にお父さんが屋根に上ってみんなついていったでしょ。（女２に）あなたは覚えてるわよね。

女２　……。

女4　（女1に）あなたは？
女1　わたしは……その日の晩ご飯がいつもより贅沢だったことはなんとなく……けど、屋根に上ったのは。
女2　姉さんも上ったわ。わたしが手を引っ張っていったもの。
女1　そう？
女4　（女3に）あなたは？
女3　わたしはあれよ……すぐに上ったわよ。
女4　どうだった屋根の上は？
妻　あなたの分だけでいいの？
女5　レモンはあります？
妻　レモン？
女5　ええ、少しでいいんです。もしあったら。

妻、部屋の奥へ引き返す。

女4　屋根に上って？
女3　屋根に上ったわ。
女4　天気はどうだった？　空は？
女3　……きれいだった。星がいっぱいで。

女2は女3に何かを言おうとして女4に制せられる。

女4　ちょっと。
女3　え、なに？
女4　（女2に）あなたはなにも言わないで。（女3に）星のほかには？　なにもなかった？
女3　……月があった。大きな月。いつもよりずっと大きく見えた。
女4　そうね、月ね。
女3　でしょ？
女1　あ。
女4　なに？
女1　あ、いや……ちょっと思い出した。
女2　もういい。やめましょう。こんな残酷な話ってない。
女4　けど、このままだといつまでたっても出発できないじゃない？　ねえ、わたしだって好きでやってるわけじゃないのよ。だってどうしようもないでしょ。
妻　（スライスしたレモンを持ってきて）これでいい？
女5　まあ。（と水にレモンを落とす）
女3　あの日は満月だったんじゃないかしら。ねえ。ちょっと欠けてたかもしれないけれど。誰か泣いてたんじゃない？　わたしは覚えてる。あのときお父さんからお酒を少しだけ飲ませてもらったの。
女2　黙って。
女3　なに？
女2　いいから。
女5　お姉さんたちがすごくうらやましい。多少のあいまいさはあっても同じ記憶を持っているでしょ。そういう意味ではわたしは妹であっても妹とは言えないのかもしれないわね。
女4　そんなことない。だったらわたしもそうでしょ。
女5　姉さんは一番確実じゃない。手紙も記憶もある。わたしはこんな紙切れだけ。大切なものだけど、しょせんはね、でしょ？
女1　あなたは心配しなくていいわ。
女2　姉さん？
女1　わたし、みんなが逃げてる時にお母さんが赤ちゃんを抱いていたのを覚えている。けど、どこかではぐれたのよね。逃げようとする人の波がほんとにすごかったから、親戚の誰かだったかしら、ちょっと抱いてもらってるあいだに、あっという間。見えなくなってしまった。狂ったように泣いてるお母さんがね、あなたの写真でもあって探せればよかったんだけどね。ふふっ……写真を持って逃げられるくらいなら子どもを見失うこともないんだから。あの赤ん坊があなたかしら。たぶん、きっと。
女5　ありがとう、姉さん。

女1　ねえ、ちょっとわたしたち三人だけにしてもらえないかしら。話がしたいの。

女4、5と妻は出ていく。

女3　満月じゃなかった？
女2　いいのよ。
女3　ねえ、教えて。お願い。
女2　月はきっとあった。満月かどうか分からないけどね、ある日の夜が満月かどうかなんて誰も覚えてないわよ。だから、いいの。
女3　けど、本当はなにか違うんでしょ。

沈黙。

女1　あの日は何十年かに一度の彗星がね、空に見える日だったの。とても大きくて、どこかに落ちるんじゃないかってみんな怖がって。泣いてる人もいた。月もあったと思うけどね、彗星なのよ。
女3　そうなんだ。
女1　花の色は？
女2　え？
女1　花壇にあった花の色は？　何色だったの？
女2　……。
女1　言って。
女2　黄色。
女1　（深く息をついて）そう……つい一週間前のことなのに、わたしはそんなことも覚えてない。あんなに大好きな、大切な花壇だったのに。
女2　わたしだってそうよ。あの家がどんなだったか、今もだんだんぼやけてきている。
女3　（入り口に立って）ここが玄関。

残りの二人も女3のところへ集まると、三人はかつてあった家のなかを確かめるように歩きだす。

女3　入ってすぐにトイレがある。
女2　廊下を少し行くと……
女1　わたしの寝室。
女2　わたしとあなたの部屋は相部屋よね。
女3　姉さん（女1）の隣の部屋。
女1　そこに納戸があって。
女3　いつも姉さんの服が多かった。
女2　そんなことないわよ。
女1　あなたたちはそうやっていつもけんかしてたのよ。
女2　小さい頃はよく怒られて閉じこめられた。
女3　怖かった。
女2　お父さんは居間に寝ていて。
女3　わたしたちがおしゃべりしてるといつまでたっても寝ることができない。

外に出て行った夫が酒瓶を持って帰ってくる。すでに酔っているようだ。女たちの家を横断して隅に座る。

女2　お父さんは家ではなんにも作ってくれなかった。
女1　台所はあなたの担当だもの。
女3　けど、文句だけはしっかり言う。
女2　わたし知ってるの。わたしの味がいいときは、父さん、自分の屋台で使ってたのよ。
女3　ほんとに？
女1　ここが裏口だったわね。
女2　朝一番にすることはまず雨戸を開けるの。
女3　この辺に母さんの写真があった。

女1　……そして庭。

三人はそれぞれ自分の記憶の庭に踏み出す。しかしその場所はバラバラだった。

沈黙。

女1　（女2に）そこが庭だったら全然違う家よ。
女2　そうね。
女3　陽の光だけは十分に入るところだったでしょ。
女1　せまいけど、明るかった。
女2　（女3に）けどそこが庭だったら全然違う家よ。
女1　片方の隅には花壇があって、もう片方には桜の木があった。
女2　むかし、死んだ猫を埋めたことがあったわ。
女1　正面の遠くの方に山脈が見えた。頂上は一年中雪が積もってた。
女3　姉さん、けどそこが庭だったら全然違う家よ。
女1　そうね。

三人とも笑い出す。そこへ女4と5がはいって戻ってくる。

女1　（入ってきた二人に）庭の場所が違うの。
女4　どういうこと？
女1　三人で、一番肝心のあの庭が、みんな違うところにあるのよ。
女2　どうしたらいいと思う？

沈黙。

青年　（現れて）師匠。なんだ飲んでるのか。
夫　なんだ。
青年　やっぱり今だ。今、金をくれないか。
夫　どうして。給料日だと言っただろ。
青年　村を出るんだ。この人たちといっしょに行く。俺も海を渡ってみたい。
夫　おいおい、寝言は寝て言え。
青年　冗談なんかじゃない。決めた。（女3を指して）あいつといっしょになる。こんな枯れていくばっかりの村じゃなくて、俺も新しい土地で始めてみたいんだ。
女3　ほんとに？
青年　ほんとだ。
女3　ほんとに？
青年　ほんとだ。
女3　うそでしょ。
青年　ほんとだ。
女5　姉さんたちは甘いのよ。もやもやとつかみどころのないものにしがみついて必死になってる。もうなくなったのよ。庭も台所も、あの家は全部。
女2　わたしたちは昔の話をしてるの。たった一週間前のことなのよ。
女5　だからもうなくなっちゃってるんでしょ。
女2　わたしたちが生きてきた証拠はあの家とあの土地が確かにあったということなの。どこかの誰かに許されてここにいるんじゃない。
女5　ほら、やっぱり。
女2　なに？
女5　あなたはわたしを疑ってる。
女1　そうじゃないのよ。
女5　疑うのはいいのよ。だって分からないことがあまりにも多すぎるんだもの。けどね、姉さん、そんな甘いことを夢見ていたらわたしはとっくの昔に死んでいた。あの村の寒さと飢えと混乱と、あなたたち知ってる？　朝起きると子どもたちの何人かは連れ去られていないの。自分がそうならないために必死なのよ。目の前で起きることがすべて。強い意志だけが自分の明日を決めるの。
青年　何の話だ？
女3　あんたは黙ってて。
青年　師匠、金をくれないか。

夫　向こうに行ってどうするんだ？　やっていけるのか。
青年　なんでもするさ。荷物運びでもなんでも。師匠だってもうこんなところで砂まみれになる生活、飽き飽きしないか。
夫　俺はもう慣れたよ。
青年　海の匂いのする町で俺は魚のとり方を教わろうと思う。毎日海へ出て、いっぱい魚をとるんだ。そして土地を買って家を建てて、こいつとやっていくよ。
夫　そうか、お前は若かったな。
青年　……。
夫　（部屋の奥に向かって）おーい、ちょっと。お前。いいから来てくれ。
妻　（現れて）なによ。
夫　こいつにさっきの金、渡してやれ。
妻　あんた酒臭い。
夫　いいんだ、俺のことは！　それよりもこいつに金だ。
妻　だって給料日でしょ。
夫　この人たちと村を出て海を渡るんだと。金がいるんだ。
妻　どういうこと？
青年　そういうことだ。
妻　え？　どうして？　街に行ってくれるんじゃなかったの？
青年　返事はまだしてないだろ？
妻　誰？
青年　（女3を指して）あいつだ。
妻　なにそれ。（と奥の部屋へ）
女3　（女1と2に）姉さん、わたしはこの人のお金で行く。大丈夫なんでしょ。
青年　三等車にも乗れないぞ。
女3　なんでもいいわよ、そんなの。
夫　なんだそれは。
青年　すいません。
妻、部屋に戻るなり金の入った封筒を青年に投げつけて出ていく。
夫　なんだそれは！
青年　はい。
夫　まあ……もういい。
青年　お世話になりました。
女3　（荷物を持って女1と2に）間に合うなら明日の汽車でいっしょに。ダメなら……先に行って待ってるから。

青年と女3は出ていく。しばらくして女5も出ていこうとする。

女1　どこ行くの？
女5　弁護士さんのところ。いつまでもここにいるわけにいかないでしょ。切符とお金をもらってどこかに宿をとるわ。ごめんなさい姉さん。けど、わたしは生きるためにここまで来て、そして海を渡るの。それがダメだと言うなら、手紙が着く前の、まだことばを知らないときのわたしに戻して。なにも知らなければわたしはずっとあの孤児院で子どもたちと過ごすつもりでいたのよ。ごめんなさい、わたしは自分の本当の生活を手に入れるためなら、なにも迷うことはないの。
女1　ちょっと待って。
女5　なに？
女1　あなた、一人きりじゃないのよ。姉さんたちがいて、いっしょに行くのよ。分かってる？
女5　ええ。
女1　故郷に行く人が、海を渡る人が決まったら仲良くしてね。助け合って。
女5　そうね。
女1　約束して。
女5　え？
女1　姉さんたちといっしょにがんばっていくんだって。新しい土地にたどり着くことができたら、支え合っていくんだって。約束して。

女５　当然でしょ。
女１　ほんとに？
女５　ええ。
女１　約束ね。してくれる？
女５　するわ。
女１　わたしが残って、この子（女２）が行くから。
女２　どうして？
女１　わたしは多分もう、長い旅は無理なの。からだがね、きっともたない。
女２　だからって置いてはいけないわよ。
女１　妹たちがいるでしょ。姉さんも。あなたがみんなを支えないと。
女２　……。
女１　ゆっくり休んで体力つけるから、落ち着いたら迎えに来て。
女２　迎えになんて簡単にできないでしょ。
女１　わたしはね、きっと船酔いするのよ。
女５　行ってくる。（と荷物を持って出ていく）
女４　……姉さん約束する。必ず迎えに来るから。待ってて。姉さんは遅れてくるだけなのよ。
女１　分かったわ。待ってる。
女４　行きましょう。
女１　よろしく頼むわね。
女２　……。

女４は自分の荷物と女２の荷物を取って、女２を連れて行こうとする。

女４　ほら。
女２　……。
女１　元気でね。
女２　（女４をふりほどいて）ちょっと離して……汽車は明日なんだから今晩くらいいいでしょ。今すぐ出て行かなくても。
女１　分かった。じゃああなたたちの宿に今晩わたしが行くから。とにかく、いい？　あなたはあの弁護士さんに頭を下げて切符とお金を受け取るの。三人で行って、いっしょにね。それからあの子を一人にしないで。あなたの妹なんだから。

女２は女４に連れて行かれた。そして部屋にいるのは夫と女１。

夫　……やっと出ていったか。ん？　まだ残ってるじゃないか。
女１　はい。

酔った夫はまじまじと女１を見つめ、そしてにこりと笑った。陽気に歌を歌い出す。その土地に伝わる古い歌だ。その振り付けと歌の調子に女１もつい笑ってしまう。夫の歌が響いている。

5

一ヶ月後。部屋では夫がコーヒーを飲みながら新聞を読んでいる。

女1　（花をもって現れて）なにこのかばん。
夫　お前のだろ。
女1　わたしの？
夫　お前がここに来たときのじゃないか。
女1　こんなかばんわたし使ってないわよ。
夫　なに言ってんだ。ひと月前にそれ持って転がり込んできたじゃないか。
女1　これ？　そうだったかしら。
夫　しまっとけよ。
女1　誰が出したの？
夫　お前だろ。
女1　わたし？
夫　出ていくのかと思ったぞ。
女1　どこに？
夫　ええっ？
女1　どこにも行きませんよ、わたしは。行く当てもない。
夫　しまっとけよ。
女1　ねえねえ、この花でした。ふふっ……あの時聞かれたでしょ。街から追い出される時に庭の花壇に咲いていた花は何色かって。わたしは白だと答えたんだわ。けどこれだった。ねえ、裏の畑のそばにいっぱい咲いてたのよ。あそこにちっちゃな花壇をつくるのどうかしら。どう思う？
夫　いいんじゃないか。
女1　ええ。
夫　聞かれたってなんだ？
女1　なにが？
夫　花の色を聞かれたって？
女1　あなたもいたんじゃないの。
夫　知らんぞ。
女1　いたわよ、あなたも。
夫　……行ってくる。
女1　お仕事？
夫　村の長老たちのパーティーだ。やっと家賃も払える。
女1　それは良かった。
夫　手紙は。
女1　なんですか。
夫　手紙はまだか。
女1　なんの？
夫　あいつらだよ。
女1　来るわけないじゃない。
夫　どうして。
女1　そんな余裕はないわよ。
夫　そろそろ来たっていいだろ。
女1　気にしてるんですか。
夫　別に。
女1　いいんですよ、そんなの。放っておけば。
夫　そうか。
女1　それに……ふふっ。
夫　なんだ。
女1　手紙が来たところでわたしは字が読めませんから。
夫　……行ってくる。
女1　わたし片づけておくから。
夫　そうか。（と部屋の奥へ）

女1は座る。花を傍らに置いて陽の射す方を見ている。なにかを待っているようなまなざしで、けれども和やかに。そのとき部屋に入った春の風が女を包み込んだ。

【了】